



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	部活動と社会生活のレリバンス： 適応 の装置としての部活動?(fulltext)
Author(s)	伊藤, 秀樹
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 68(1): 71-82
Issue Date	2017-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2309/146936
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

部活動と社会生活のレリバンス

——〈適応〉の装置としての部活動？——

伊藤 秀樹*

学校教育学分野

(2016年9月13日受理)

1. 問題設定

本研究の目的は、若年層が、学校での部活動と卒業後の社会生活（職業生活・日常生活）の間に、どのようなレリバンス（意義）を認知しているのかについて明らかにすることにある。そのことを通して、部活動が若年層にとって、社会生活への適応を支える要因となりうると同時に、困難をもたらす要因にもなりうるという、その二面性を描き出していく。

部活動は、教育課程に含まれない課外活動であるにもかかわらず、ほとんどの中学校・高校に設置されている、重要な教育活動である。部活動に対しては批判も多く、過熱化、勝利至上主義、しごき・体罰、けが・障害、他の学校教育活動への圧迫、教師の負担などの問題点が繰り返し指摘されてきた（中澤 2014, 内田 2015など）。しかし部活動は、それらの批判にもかかわらず、保護者や一部の教師の支えもあり、現在も学校教育の中に大規模な形で維持され続けている（中澤 2014）。

本研究では、このように賛否が分かれる部活動のあり方について、若年層が認知している卒業後の社会生活へのレリバンスの検討をもとに、新たな角度から問題提起を行っていく。

部活動は、学校教育の内部に位置づくことから、生徒の卒業後の社会生活への影響をふまえながら実施されていると考えられる。実際に中澤（2014）では、運動部活動に積極的な教師が部活動を生徒指導の場として捉え、日々の指導を行っている姿を描き出している。しかし、これまでの部活動研究や「教育のレリバンス」研究では、部活動での経験が卒業後の社会生活

に与える影響に分析の焦点を当てることはなかった。

そこで本研究では、若年層を対象とした質問紙でのパネル調査の自由記述をもとに、回答者たちが認知している部活動の社会生活へのレリバンスについて、そのパターンを抽出する。そして、そこで抽出されたパターンをもとに、部活動が若年層の社会生活にいかなる帰結をもたらしているのかについて考察を行う。

2. 先行研究の検討

これまで、部活動に関しては、教育社会学的な観点から数多くの研究が行われてきた（代表的なものとして、西島編 2006；中澤 2014；内田 2015など）。しかし、これまでの部活動研究や教育のレリバンス研究では、部活動が卒業後の社会生活に与えるレリバンスについては、看過される傾向にあった。

まず、これまでの部活動研究では、東原（2011）が述べるように、部活動が学校卒業後の生活に与える影響についてはほとんど論じられてきていない。ただし、東原（2011）では私立大学卒業生への質問紙調査の分析によって、大学での運動部活動の継続者がそれ以外の大学卒業者に比べ、初職を長く継続している傾向にあることを明らかにしている。

東原（2011）の知見からは、部活動が学校卒業後の職業生活に何らかのレリバンスを与えている可能性が示唆される。しかし、教育のレリバンス研究では、部活動が社会生活に与えるレリバンスについて取り上げることがなかった。これまでの教育のレリバンス研究には、本研究の関心に照らせば、以下の2つの課題があったといえる。

* 東京学芸大学 教育学講座 学校教育学分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

第1に、本田(2005, 2009)などをはじめとした大多数の研究が、その分析の焦点を、学習者の労働力としての質の向上をもたらすような「職業的レリバンス」のみに当ててきたということである。そのため、専門的な教科/科目以外での学校の活動(普通教科や一般教育科目、特別活動、総合的な学習の時間、部活動など)が、卒業生の社会生活にいかなるレリバンスを形成しうるのかについては、精緻に分析されてはこなかった。

第2に、これまでの教育のレリバンス研究では、計量研究が主であり、教育のレリバンスの有無や効果、規定要因の実証的検証に重きが置かれてきたということである(片山 2014)。その結果、人々が経験する教育のレリバンスに、実際にはいかなるパターンがあるのかについて、それをボトムアップに明らかにするという試みはほとんど行われてこなかった。

唯一、これらの2つの課題を同時に乗り越えようとした研究として、伊藤(2015)がある。伊藤(2015)では、若年層を対象とした質問紙でのパネル調査の自由記述をもとに、回答者が認知している教科教育のレリバンスのパターンを描き出している。そこでは、回答者たちが、専門的な教科/科目で学んだ知識・技能だけに限らず、普通教科/一般教育科目で習得した知識・技能についても、現在の職業生活と日常生活の両者へのレリバンスを認知していることを明らかにしている。そこで本研究は、伊藤(2015)の研究関心を引き継ぎながら、部活動の社会生活へのレリバンスに目を転じて、質問紙調査の自由記述の分析を行う。

なお、本研究の分析は伊藤(2015)と同様、人々が認識している教育のレリバンス、つまり教育の「主観的」レリバンスについての分析である。教育の主観的レリバンスの分析に関しては、これまで、その量的分布やパターンが必ずしも「客観的」な教育のレリバンスのそれと一致するとは限らないという批判が加えられてきた(本田 2005; 小山 2007)。より具体的に述べるなら、客観的には教育経験にレリバンスが「ある」のに主観的には「ない」と感じられていたり、またその逆であったり、という誤認の問題に対する批判である。

伊藤(2015)はこうした批判をもとに、自らの研究を、教育の客観的レリバンスの量的分布やパターンにより適切な形で漸近するための準備作業として位置づけている。しかし、教育の主観的レリバンスの分析には、それ自体、教育の客観的レリバンスの分析とは異なる「教育と社会の接続様式」を明らかにするという意義があると考えられる。

解釈的アプローチの視点に沿えば、人々の行為はあらかじめ社会構造によって規定されているのではなく、行為者の解釈に影響を受けるものである(稲垣 1990: 67)。つまり、人々の解釈をもとに、行為が生まれるわけである。そして社会構造は、行為者たちの解釈過程のなかで構成され、維持されるものである(稲垣 1990: 71)。

教育の主観的レリバンスの分析では、単に職業生活や日常生活で有用となる経験というよりは、職業生活や日常生活で有用なものとして解釈され、人々の行為に影響を与えうる経験を明らかにすることになる。つまり、教育(本研究の場合、部活動)の主観的レリバンスの分析は、学校でのどのような経験が人々の解釈を経て社会生活での行為の源泉になるのかという、人々の解釈と行為の過程を重視した教育と社会の接続様式を明らかにするものだといえる。

3. 分析枠組み

分析に入る前に、人々が認知する教育の主観的レリバンスがいかなる性質をもつのかについて、理論的に精緻化しておきたい。本研究では、人々による教育の主観的レリバンスの認知を、心理学で提唱されている「自伝的推論」(autobiographical reasoning)のプロセスの一部として捉える。自伝的推論の議論は、教育の主観的レリバンスの認知が当人の自己像や将来の行為に影響するという本研究の想定に、根拠を与えるものである。

自伝的推論とは、提唱者のHabermas and Bluck(2000)によると、「個人の過去に関する自己省察的な思考や語り」のプロセスであり、過去と現在を関連づけるために、人生の各要素と自己とを結びつけるプロセスである(Habermas and Bluck, 2000: 749)。また、Habermasは、「自伝的推論は、個人の過去や現在、未来、自己と発達といった異なる部分を結びつける行為」(Habermas 2011: 1)であると述べている。自伝的推論は、想起された過去の出来事と現在・未来の出来事、さらには自己像を結びつけて解釈するプロセスであるといえる。

佐藤(2014)は、自伝的推論についての議論を整理し、自伝的推論が単に自分が経験したさまざまな出来事を思い出すだけでなく、具体的に以下の4つの要素をもつプロセスであることを示している。

- ①想起を通して過去の自分と現在の自分を対比する
- ②複数の出来事を結びつけて解釈する

- ③過去から現在まで変わらぬ自己像を確認する
- ④過去の経験から何らかの洞察や教訓を引き出して今後の行動指針とする

本田（2005）による「レリバンズ」の定義に立ち戻ると、こうした自伝的推論のプロセスは、教育の主観的レリバンズを認知するプロセスと重なるものだと考えることができる。

レリバンズとは、本田（2005）によれば、「2つの異なるもの同士の間で成立する、何らかの点でポジティブな関連性」（本田 2005：146）のことである。本田（2005）では、レリバンズが「ポジティブな関連性」であることから、レリバンズを「意義」と読み替えている。

本田（2005）によるレリバンズの定義をふまえると、人々が教育（部活動を含む）の主観的レリバンズを認知するプロセスには、以下の3つの要素があると考えられる。第1に、過去の学校生活での経験を想起する。第2に、想起された「学校生活での経験」と現在の状況とを対比し、解釈の中で結びつける。第3に、それらの解釈上の結びつきの中に何らかのポジティブな関連性を見出す。

これらのプロセスは、自伝的推論における、「①想起を通して過去の自分と現在の自分を対比する」と「②複数の出来事を結びつけて解釈する」という2つの要素と重なるものであるといえる。このことをふまえると、教育の主観的レリバンズを認知するプロセスは、自伝的推論のプロセスの一部であるといえるだろう。そして、自伝的推論の残りの2つの要素をふまえるならば、教育の主観的レリバンズを認知するプロセスが、以下の2つの形で発展していく可能性を想定することができる。

第1に、教育の主観的レリバンズの認知が自己像の形成・維持につながる可能性である。自伝的推論の「③過去から現在まで変わらぬ自己像を確認する」という要素をふまえるならば、学校教育での経験と現在の経験とのレリバンズを認知するプロセスが、その経験の結びつきに基づく自己像を形成・維持するプロセスにつながることを想定できるだろう。たとえば、専門学校での職場実習での経験が、卒業後に就職した職場でも生かされるなかで、「仕事でもなんとかうまくやれる自分」という自己像がもてるようになる、というようにである。

第2に、教育の主観的レリバンズの認知が、洞察や教訓を生み出し、その後の行為に影響を与える可能性である。自伝的推論の「④過去の経験から何らかの洞

察や教訓を引き出して今後の行動指針とする」という要素からは、過去の教育経験を想起してその主観的レリバンズを認知するなかで、洞察や教訓が生まれ、その後の行為に反映されていくという可能性を想定することができる。たとえば、中学校・高校で学んだ英語が、海外旅行の際に思いのほか通じたので、それを教訓としてさらなる海外旅行にチャレンジする、というようにである。

なお、生み出された洞察や教訓は、「がんばれば英語が話せる自分」というように、自らについての肯定的な認識につながる場合もある（佐藤 2007）。洞察や教訓が生み出されるプロセスは、自己像の形成・維持のプロセスと重なりあいながら、行為を下支えする場合があると考えられる。

2・3節の内容をまとめるならば、部活動は社会生活へのレリバンズを有する可能性があり、その主観的レリバンズのパターンを捉えることには、人々の解釈と行為の過程を重視した教育と社会の接続様式を明らかにできるという意義がある。そうしたなかで、部活動の主観的レリバンズを認知するプロセスは、自伝的推論のプロセスと重ね合わせて考えることができる。自伝的推論のプロセスをふまえるならば、部活動の経験は、現在の社会生活でのレリバンズを認知するプロセスを通して、人々の教訓や洞察、自己像を形成し、未来の行為の源泉になる可能性をもつものだといえる。

4. データ

本研究で分析に用いるデータは、東京大学社会科学研究所が実施している「高校卒業後の生活と意識に関する調査」（通称：JLPS-H）のうち、wave6（回答者は高卒6年目、2009年11～12月実施、N=465）とwave9（回答者は高卒9年目、2012年11～12月実施、N=514）のデータである。wave6・wave9の回答者の属性は、表1のとおりである。

表1 回答者の属性

		wave6	wave9
性別	男性	38.3%	37.9%
	女性	61.7%	61.1%
	不明	0.0%	1.0%
現在の状況	正社員・公務員	57.0%	58.0%
	自営・家族従業	1.1%	3.5%
	非正社員	22.6%	25.9%
	学生	11.4%	1.2%
	非就業・非就学	8.0%	11.5%
(有効回答者数)		(465)	(514)

JLPS-Hは質問紙でのパネル調査であり、最初の調査である wave1 では、2004年1月～3月にかけて、4県101校の全日制高校に在学する高校3年生を対象に実施し、7,563名の回答を得た。その後は、追跡調査の承諾者に対して、2004年10月以降、1年おきに郵送による質問紙調査を実施している（ただし2007年度のみ未実施）¹⁾。

この調査では、教育の主観的レリバンスに関する設問を wave6 と wave9 で設けている。それらの設問では、まず、教育の主観的レリバンスを認知している程度について4つの質問項目を用意し、4件法で回答を得ている²⁾。続いてその下に、「具体的に、どのようなことが現在の生活のどのような面で役立っていますか」という質問項目を設けており、回答を枠内に自由に記述してもらっている。

JLPS-Hは、wave6・wave9ともに300名弱が教育の主観的レリバンスに関する自由記述に回答をしており（表2）、その点で他に類を見ないデータである。部活動についても、wave6では24名、wave9では42名が、現在の社会生活に役立ったと記述している（表2）。うち7名は、wave6・wave9の両方で部活動のレリバンスに言及しているため、部活動のレリバンスについて記述した回答者はwave6・wave9を合計すると59名であった。本研究ではこれらの59名の回答について分析を行う。

部活動の主観的レリバンスに関する回答からパターンを抽出し、考察を試みようとする本研究にとって、教育の主観的レリバンスに関して豊富な回答が得られている JLPS-Hは、適切なデータセットであるといえる。ただし、JLPS-Hのデータを分析するにあたっては、以下の2つの限界も生じる。

1点目は、パネル調査を継続していくなかで、女性

が回答者の6割強を占めるなど、回答者の属性に偏りが生じていることによる限界である（表1）。本研究で見出された主観的レリバンスのパターンは、高校時点で同じ学年集団であり、パネル調査に継続して回答しているという特性をもったサンプルから得られた、部分的なパターンであるということに留意が必要である。

2点目は、学校段階や種目の違いに十分に配慮した分析ができないという限界である。自由記述はインタビューとは異なり、重要な情報が欠落していても、それを聞き直して埋めることができない。それゆえ、本研究のデータには、①どの学校段階での部活動か（中学校か高校か大学か）、②どの種目の部活動か（そもそも運動部か文化部か）、の2点がわからない回答が多数含まれている。ただし1点目については、中学校・高校に比べて大学の部活動加入者は少ないことが想定されるため、大多数の記述は中学校・高校の部活動に関するものと想定することができる。

本研究はそうした2つの限界を抱えているが、それでも、これまで問われてこなかった「部活動の主観的レリバンス」という問いに対して、ある程度の回答のバリエーションが担保されているデータをもとに検討することには、十分な意義があると考えられる。本研究の試みは、まだ明らかにされていない問いに対して、今後の研究に向けた起点を作る試みだといえる。

分析と考察の手順は、自伝的推論のプロセスに基づき、以下の通りに進める。第1に、どのような過去の部活動の出来事が想起されているのかをもとに、自由記述をパターン化する。パターンとして抽出する基準は、「3名以上が自由記述の中で言及した出来事」とする。第2に、それらの過去の出来事のパターンについて、回答者が「どのような現在の出来事と対比して

表2 主観的レリバンスを認知した教育場面

		wave 6		wave 9	
授 業	専門教科（実習含む）	131	45.2%	103	34.7%
	普通教科	8	2.8%	25	8.4%
	分類困難（PC・英語含む）	31	10.7%	29	9.8%
授 業 外	部活動	24	8.3%	42	14.1%
	サークル活動	12	4.1%	2	0.7%
	特別活動	10	3.4%	6	2.0%
	留学	3	1.0%	4	1.3%
	アルバイト	15	5.2%	9	3.0%
（有効回答者数）		（290）		（297）	

※ wave6・wave9を合わせて5名以上が回答した教育場面を抽出

※ 1人の回答の中に複数の場面に関する記述が含まれている場合は、すべての場面で人数に含めている

いるのか」「何を習得した（技能を身につけた／教訓を得た／洞察した）と解釈しているのか」の2点に配慮しながら、自由記述の特徴を分析する。第3に、見出された主観的レリバンスの特徴から、「いかなる自己像が形成される可能性があるのか」「いかなる行為が生まれる可能性があるのか」について考察し、生じうる帰結を指摘する。

5. 分析：部活動の主観的レリバンスのパターンと特徴

部活動のレリバンスに言及している59名のwave6・wave9での自由記述について、部活動上のどのような出来事が言及されているかをもとにパターン化したものが、図1である。自由記述では、半数以上（38名）の回答者が人間関係上の経験について言及した。一方で、人間関係以外の経験に言及した回答者は18名であった。（うち5名は、人間関係上の経験と人間関係以外の経験の双方に言及している。）また、3名以上が言及している出来事として、人間関係上の経験については「集団行動・チームワーク」「リーダーシップ」「上下関係」「礼儀・あいさつ」、人間関係以外の経験については「つらい経験」を、パターンとして抽出した。

以下では図1のそれぞれのパターンについて、回答者たちが過去の出来事からどのような点を習得したと認識し、現在のどのような出来事と結びつけて解釈しているのかに着目しながら、その記述の特徴を示していく。

5. 1 人間関係上の経験

まず、部活動での人間関係上の経験について言及し

た回答者の自由記述が、全体としてどのような特徴があるのかについて確認しておく。

自由記述では、【記述1】【記述2】のように、部活動での人間関係上の経験が今の仕事や日常生活で人間関係を構築する際に役立っているという記述が多数見られた。それらの自由記述からは、【記述2】にもみられるように、回答者たちが部活動で「思いやり」「他人を敬う」といった他者への配慮の重要性を学び取ったと解釈している様子を読み取ることができる。

【記述1】 アルバイトや部活動での縦と横の人間関係の作り方は社会に出てもそのまま役に立つ。[wave6 / 男性 / 四年制大学卒 / 正社員]

【記述2】 学生時代、吹奏楽部に所属していた。基本的な事ではあるが挨拶の大切さ、時間前に余裕を持って行動する事、仲間や友人とのかかわりで、言葉づかいや思いやりの気持ちを持つ事。勉強以外で今の生活に役立っている事が沢山ある。子育てをしている現在の同じ母親どうしの交流でのつき合い方に役立っている。[wave9 / 女性 / 高校卒 / 非就業・非就学]

こうした認識の背景には、部活動がさまざまな立場・個性を有する人々と交流する場である、という性質があると考えられる。自由記述では、部活動での「様々な人と出会いました」「多くのいろんな人と交流をもちました」といった経験と同時に、その経験が現在の生活の中で役立っている様子が記述されている（例：【記述3】）。

部活動では、教室での授業場面とは異なり、同級生・教師だけでなく、先輩や後輩など、多様な立場に

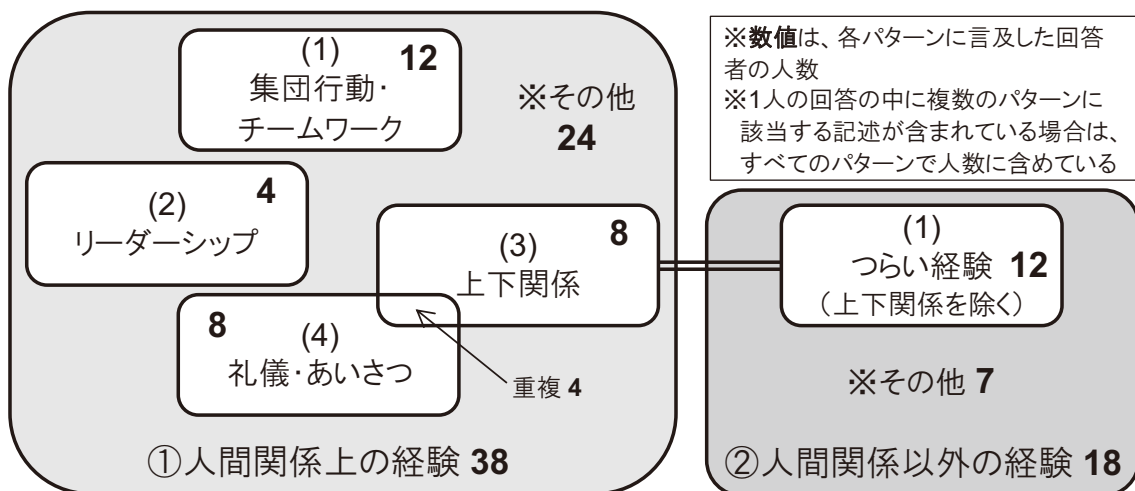


図1 主観的レリバンスを認知した部活動の出来事

ある人たちと関わることになる。また、部活動はその種目への興味・関心を軸として集まる集団であるため、メンバーの性格や個性は人それぞれであるだろう。部活動の人間関係の構築方法がレリバンスとして認知されやすかったのは、さまざまな立場・個性を持った人々と交流することになるという部活動の環境が、卒業後の社会生活で結ばれる人間関係と類似していたからではないかと考えられる。

【記述3】 学生時代の部活や留学を通して様々な人と出会いました。第一印象で苦手だと思っても、付き合ってみると第一印象とは全く違いとても気が合い、今では大親友。この様な経験から初めからこの人とはムリ!!とは決めつけず、知ることが大事だと思いました。そうすることで多くの人から助けられていると思います。[wave9 / 女性 / 四年制大学卒 / 非就業・非就学]

このような部活動の場の特質のなかで、一定数の者たちが、「集団行動・チームワーク」「リーダーシップ」「上下関係」「礼儀・あいさつ」の経験が社会生活の中で役立ったという内容を記述している。以下ではそれぞれのパターンの特徴について見ていく。

5. 1. 1 集団行動・チームワーク

自由記述では、12名が、部活動での「集団行動」「団体行動」「チームワーク」といった経験が卒業後の社会生活で役立っていると記述している。彼ら／彼女らの記述からは、団体行動やチームプレーのなかで習得した「協調性」が、現在の生活で人間関係を構築する際に役立っていると解釈している様子を読み取ることができる(例：【記述4】【記述5】)。

【記述4】 私は、9年間学校で野球部に所属しておりました。上下関係、チームプレーなどから学んだ協調性、礼儀が仕事上(営業職)において、人間関係形成(社内、外を問わず手前の味方をつくる)をする上で役に立っていると感じております。[wave9 / 男性 / 専門・専修学校卒 / 正社員]

【記述5】 部活の団体行動が現在の協調性に活かされている。[wave9 / 男性 / 四年制大学卒 / 正社員]

5. 1. 2 リーダーシップ

部活動の中でリーダーシップをとった経験も、現在の仕事や生活に役立っていると、4名の回答者から認識されている。これらのリーダーシップに関する記述

は、問題への対処法を習得したという点とともに記述されているという特徴がある(例：【記述6】【記述7】)。

【記述6】 部活動で中心になって活動したことが、問題解決能力や臨機応変に行動する力を養ったと考えている。団体行動を通して、全体のなかで自分の役割や行動がどのような影響を与えるか考えるようになった。会社で仕事をする上でも作業効率や人間関係の形成などに役立っていると感じている。[wave6 / 女性 / 四年制大学卒 / 正社員]

【記述7】 部活動や生徒会活動で人との接し方、まとめ方、色々な事の取り決め、困難な時の対処の仕方など。[wave9 / 女性 / 専門・専修学校卒 / 非就業・非就学]

5. 1. 3 上下関係

部活動の特徴ともいえる先輩・後輩との関係、さらには教師との関係からなる「上下関係」の経験についても、8名が記述していた。

彼ら／彼女らは、部活動での上下関係に関して、以下の2つの経験が社会生活の中で役立ったと記述している。1つは、教師・先輩・後輩との関わりである。先述の【記述1】や【記述4】を振り返ると、部活動で身につけた教師・先輩・後輩との関わり方が、卒業後に人間関係を構築する場面で役立ったと認識している様子を読み取ることができる。

もう1つは、上下関係の「厳しさ」である。【記述8】や【記述9】からは、部活動での上下関係の厳しさが、職場の上下関係への円滑な適応や就業の継続につながったと解釈している様子を見出すことができる。

【記述8】 部活内の上下関係が厳しかったので、比較的楽に仕事の環境に慣れた。[wave9 / 男性 / 高校卒 / 公務員]

【記述9】 部活動が、とても厳しいものだった。特に、上下関係が厳しく毎日ツラく、苦しい日々を送り、何度も逃げ出したいと思ったが最後まで続けることができた。今の会社に入社して、3年半たつが、上司が口ばかりであわず、とても嫌いだ、今日まで続けてこれたのは、部活でつちかった忍耐力があつてこそだと思う。[wave6 / 男性 / 専門・専修学校卒 / 正社員]

5. 1. 4 礼儀・あいさつ

部活動での他者との関わりの中で礼儀やあいさつを求められた経験が、現在の他者との付き合いの中で役に立ったという点についても、8名が記述していた。そのうち4名は上下関係の経験についても同時に記述しており(例:【記述4】【記述10】)、礼儀・あいさつは上下関係のなかで求められているということが示唆される。

【記述10】部活動をしていたので、先ばい、後はい等の接し方。先生や師に対しての言葉使い、あいさつなど、が自然に出来る気がする。[wave6 / 女性 / 専門・専修学校卒 / 正社員]

5. 2 人間関係以外の経験

次に、人間関係以外の経験についての記述の特徴をみていきたい。挙げられた過去の部活動の出来事の大多数は、部活動での「つらい経験」に関するものであった(18名中12名が記述)。

5. 2. 1 つらい経験(上下関係を除く)

自由記述からは、5. 1. 3で挙げた上下関係の厳しさだけでなく、厳しい練習をはじめとした体力面・精神面でのさまざまなつらい経験が、現在の仕事を続けていくうえで役立っていると認識されている様子が見えてくる。それらの記述からは、回答者たちが仕事などでの厳しい状況を、部活動で培った「忍耐力」「体力」「精神力」によって乗り越えていると解釈している様子を読み取ることができる(例:【記述11】【記述12】【記述13】)。

【記述11】部活動での大変だった経験(体力的にも精神的にも)が、仕事をしていくうえでのいい糧になっている。[wave9 / 男性 / 四年制大学中退 / 正社員]

【記述12】部活動で培った忍耐力が現在の仕事に役立っている。[wave9 / 女性 / 四年制大学卒 / 正社員]

【記述13】学校ではずっと運動部でした。前の職場で、毎日遅くまで残業してた時、仕事も体力が必要なんだと感じ、運動部で良かったなと思いました。[wave9 / 女性 / 四年制大学卒 / 公務員]

6. 考察: 部活動の主観的レリバンスが生み出しうる自己像と帰結

部活動と社会生活の主観的レリバンスについて、そのパターンと特徴を改めて示したものが、図2である。部活動のそれぞれの経験は、主に、社会生活での「人間関係の構築」と、「職場環境への適応+就業の継続」という2つの出来事との対比のうえで、主観的レリバンスが見出されている。また、記述からは、回答者たちが「他者への配慮の重要性」「協調性」「問題の対処法」「忍耐力」「体力」「精神力」などを部活動から習得したと認識している様子を見出すことができる。

これらの知見からは、以下の2点の自己像が、人々に形成されうると解釈することができる。1点目は、他者への配慮の重要性や、協調性、問題の対処法などについての教訓や洞察を得たことによる、「多様な立場や個性をもつ人々の中でも人間関係をうまく形成できる」という自己像である。2点目は、忍耐力・体

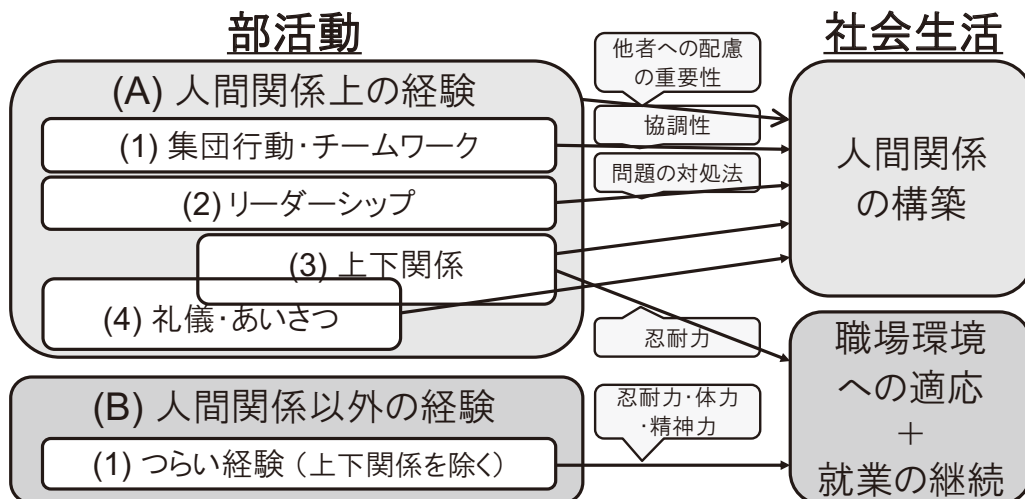


図2 部活動と社会生活の主観的レリバンス

力・精神力が備わったとする洞察を得たことによる、「困難があっても耐え忍ぶことができる」という自己像である。

本研究の分析枠組みに基づけば、こうした自己像は、教訓や洞察とともに、未来の行為の源泉となりうるものだと考えられる。では、こうした自己像・教訓・洞察をもとに生じうる行為と、それによってもたらされる帰結とは、いかなるものだろうか。以下では部活動と社会生活の主観的レリバンスがもたらしうる帰結について、3点指摘しておきたい。

1点目は、職業生活や日常生活における人間関係を、より充実したものにする可能性である。他者への配慮や問題の対処法に関する教訓は、実際に人間関係を新たに築き上げていく際に役立つかもしれない。また、「多様な立場や個性をもつ人々の中でも、人間関係をうまく形成できる」という自己像は、いろいろな人と自らつながりを作ろうとする積極性につながるかもしれない。【記述14】は大学の部活動についての記述だが、多様な立場や個性をもつ人々と関わるという条件は、中学校・高校の部活動に関しても同様である。そのため、中学校・高校の部活動についても、そこでの人間関係上の経験が他者と積極的に関わるという態度につながる可能性を想定することができる。

【記述14】私は、大学生の時に、部活をやっていて、多くのいろんな人と交流をもちました。集団行動がほとんどだったので、1人の時間というものがほとんどなしに近かったです。現在、働いている職場は大きく、自分が所属している課は人数が多く、且つ、転勤を伴うところなので人の出入りが激しい為、本当にたくさんの人と接してきました。私は元々、他人と話したり、積極的に動くのが苦手なタイプですが、その部活があったおかげで、自分から声をかけたり、動き回ったりと、今の生活に大変役立っていて、部活は貴重な体験でした。[wave6 / 女性 / 四年制大学卒 / 非正社員]

しかし、職業生活に関してはネガティブな帰結も想定される。2点目は、若者たちが、個人の忍耐によって、問題のある職場環境に対処できるようになる可能性である。部活動でのつらい経験や、「困難があっても耐え忍ぶことができる」という自己像は、上下関係の困難や職場での長時間労働を耐え忍ぶための支えとなりうる（例：【記述9】【記述13】）。しかし見方を変えれば、そうした部活動経験や自己像は、職場での問題を個人の忍耐で解決できるものと認識させ、問題のあ

る職場に個人を長くとどめさせるきっかけにもなりうる」と解釈できる。

上記と関連して、3点目は、問題のある職場環境に個人の忍耐で対処しようとする態度のもとで、職場の中での「つらい上下関係」が正当化され、再生産されていく可能性である。【記述9】や下記の【記述15】からは、「つらい」と認識されるような部活動の上下関係が、職場での上下関係にもちこまれている様子が見出せる。そうした職場では、部活動でのつらい上下関係になじんできた人だけが職場で生き残ることで、職場内のつらい上下関係が正当化され、再生産されていくことも危惧される。

【記述15】学生時代、部活動（運動部）に所属していなかった為、体育会系の思考がわからない。例えば、怒られる、指示される事は、見込みがあるとは思わず、イジメと感じたり。育った環境で促え方が違うので、学生時代に沢山の状況を経験しての方がよいと思った。[wave9 / 女性 / 四年制大学卒 / 正社員]

7. まとめと示唆

本研究の分析から見出された部活動と社会生活の主観的レリバンスのパターンは、大きく2つに集約できる。1つは、「部活動での人間関係上の経験が、社会生活で人間関係を構築する際に役立っている」という主観的レリバンスである。もう1つは、「部活動でのつらい経験が、職場環境への適応や就業の継続につながっている」という主観的レリバンスである。

また、そうした部活動の主観的レリバンスがもたらしうる帰結としては、「職場や日常生活における人間関係の充実」「個人の忍耐によるつらい職場環境への対処」「職場におけるつらい上下関係の正当化/再生産」の3点が導き出せる。これらの帰結に基づくと、部活動は若年層にとって、社会生活への適応を支える要因となりうると同時に、困難をもたらす要因にもなりうるという、二面性をもった存在であると考えられることができる。

本田（2009）では、仕事に就く者が身を守るためには、仕事の世界からの要請に〈適応〉するための手段と、理不尽な要求を突きつけてくる雇用主に対して〈抵抗〉するための手段の、両者が必要だと述べている。本研究で指摘してきた、部活動経験から得られうる教訓、洞察、自己像はどれも、職場への〈適応〉に資するものであった。一方で、雇用主の理不尽な要求

に〈抵抗〉するために、部活動で年長者との交渉の手段や労働法などを学び取っている様子は見出せなかった。本研究の知見からは、部活動は若者たちを問題のある職場環境に〈適応〉させるための装置になっている、ということが示唆される。

では、上記の課題を解消していくためには、どのようなアプローチが有効だろうか。部活動と職業生活のレリバンス認知が行為に影響を与える可能性をふまえるならば、一方のあり方の変化がもう一方のあり方の変化を引き起こすことが想定できる。たとえば、部活動が「忍耐力」を養う場ではなく活動自体を楽しむ場へとシフトしていくことで、過酷な労働条件を課す企業は若者たちの〈抵抗〉や離脱に遭いやすくなるかもしれない。また、企業の長時間労働や理不尽な上下関係を積極的に取り締まっていくことで、部活動での厳しい上下関係や「しごき」はレリバンスの宛先を失うことになる。部活動と職業生活のネガティブな結びつきを断つために、つらい経験を課すことを正当化するような両者の文化を書き換えていく必要があるということを、本研究の実践的示唆として挙げておきたい。

続いて、本研究の学問的示唆については、本研究で例証したように、調査で捉えた教育の社会生活へのレリバンスが「主観的」レリバンスであることの特徴を生かした分析・考察が可能である、という点が挙げられる。本研究では、主観的レリバンスの認知のプロセスが自伝的推論のプロセスと重なるという分析枠組みのもとに、主観的レリバンスについての記述から、人々の解釈と行為に基づく部活動と社会生活の接続のあり方を示すことができた。他の教育場面の主観的レリバンスについても、分析の中で浮かび上がった回答者たちの教訓・洞察・自己像や実際の行為をもとに、主観的レリバンスがもたらしうる帰結を考察する、といった研究を行うことができるだろう。

最後に今後の課題であるが、本研究ではデータの限界から、部活動を経験した学校段階や種目の違いに配慮した分析はできなかった。より大規模なサンプルサイズの質問紙調査に、部活動の主観的レリバンスに焦点化した自由記述の設問を設けることで、主観的レリバンスのより詳細なパターン・特徴や学校段階・種目間の差異を捉えられるかもしれない。さらには、部活動経験に基づく職場への〈抵抗〉の契機も見出すことができるかもしれない。本研究の知見をさらに精緻化していくような分析・考察は、今後必要な作業であるだろう。

付記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究(S)(22223005)、基盤研究(B)(16H03778)、基盤研究(C)(25381122)および厚生労働科学研究費補助金政策科学推進事業(H16-政策-018)の助成を受けたものである。東京大学社会科学研究所パネル調査の実施にあたっては、社会科学研究所研究資金、株式会社アウトソーシングからの奨学金寄付金を受けた。パネル調査データの使用にあたっては社会科学研究所パネル調査企画委員会の許可を受けた。

注

- 1 wave4以降では回答方法を質問紙とweb回答システムの2つから選ぶことが可能であり、多い年では1割以上の回答者がweb回答システムを利用している。また、wave2・wave4では、高卒者への調査と同時に、その保護者に対しても質問紙調査を実施している。各waveの回収状況など調査についての詳細は、伊藤ほか(2013)に記載されている。
- 2 質問項目は、「教科内容が、現在の仕事に役立っている」「学校生活での体験が、現在の仕事に役立っている」「教科内容が、人間形成に役立っている」「学校生活での体験が、人間形成に役立っている」の4つである。選択肢はそれぞれ、「とてもそう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法である。

引用文献

- Habermas, T., 2011, "Autobiographical Reasoning: Arguing and Narrating from a Biographical Perspective", *New Directions for Child and Adolescent Development*, 131: 1-17.
- Habermas, T. and S. Bluck, 2000, "Getting a Life: The Emergence of the Life Story in Adolescence", *Psychological Bulletin*, 126(5): 748-769.
- 本田由紀, 2005, 『若者と仕事——「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会。
- , 2009, 『教育の職業的意義——若者, 学校, 社会をつなぐ』筑摩書房。
- 稲垣恭子, 1990, 「教育社会学における解釈的アプローチの新たな可能性——教育的言説と権力の分析に向けて」『教育社会学研究』47: 66-75.
- 伊藤秀樹, 2015, 「教科内容の多元的なレリバンス——JLPS-H自由記述の分析」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ』

89 : 1-17.

- 伊藤秀樹・鈴木富美子・元濱奈穂子, 2013, 「高卒9年目の働き方, 親子関係, サポート・ネットワーク——高卒パネル調査wave9の結果から」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ』71 : 1-12.
- 片山悠樹, 2014, 「工業教育における『ものづくり』の受容過程」『教育社会学研究』95 : 25-46.
- 小山治, 2007, 「法学知と企業法務知の知識構造の比較分析——『知識の社会的構成』という視点からみた職業的レリバンス研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』46 : 197-206.
- 中澤篤史, 2014, 『運動部活動の戦後と現在——なぜスポーツ

は学校教育に結び付けられるのか』青弓社.

- 西島央編, 2006, 『部活動——その現状とこれからのあり方』学事出版.
- 佐藤浩一, 2007, 『自伝的記憶の構造と機能』新潟大学大学院現代社会文化研究科博士学位論文.
- , 2014, 「自伝的推論——概念ならびに評価方法の整理と包括的な枠組みの提案」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』63 : 129-148.
- 東原文郎, 2011, 「道内私大の<体育会系>就職——卒業生調査の結果から」『札幌大学総合論叢』32, 183-196.
- 内田良, 2015, 『教育という病——子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』光文社.

部活動と社会生活のレリバランス

——〈適応〉の装置としての部活動？——

Relevance between School Club Activities and Social Lives:

Are School Club Activities Devices of “Adjustment”?

伊藤 秀樹*

Hideki ITO

学校教育学分野

Abstract

This study examined that what relevance young people recognized between experiences of school club activities and experiences of social lives after they graduated.

Further research about school club activities and relevance between school education and social life did not examined the effects of experiences of school club activities on experiences of social lives. Therefore, first, this study examined the patterns of subjective relevance between experiences of school club activities and experiences of social lives after graduation, which were recognized by young people. Next, this study considered the effects on the social lives of young people caused by the patterns of subjective relevance.

This study used data from Japanese Life Course Panel Surveys for the high school graduates (JLPS-H) conducted from 2004 to 2016 by the Institute of Social Research, the University of Tokyo. This study analyzed descriptions on open-ended question about subjective relevance between school education and social life at wave6 (conducted in 2009) and wave9 (conducted in 2012). 59 cases described about the subjective relevance of school club activities and this study analyzed these descriptions.

Through the analysis, this study found two patterns of subjective relevance between experiences of school club activities and social lives. First, some respondents were recognized that experiences of relations with other people at the school club activities was useful to make relationships with other people at the social life after graduation. Second, some other respondents were recognized that experiences of hard times at the school club activities let them continue hard working.

These findings suggest that school club activities are devices which make young people adjust to the problematic workplaces.

Keywords: subjective relevance, autobiographical reasoning, “adjustment” and “resistance”

Department of School Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

要旨: 本研究では、若年層が学校での部活動と卒業後の社会生活（職業生活・日常生活）との間に、どのようなレリバンス（意義）を認知しているのかについて検討を行った。

部活動は、学校教育の内部に位置づくという性質上、生徒の卒業後の社会生活への影響をふまえながら実施されていると考えられる。しかし、これまでの部活動研究や教育のレリバンス研究では、部活動での経験が卒業後の社会生活に与える影響について、ほとんど着目してこなかった。そこで本研究では、若年層を対象とした質問紙でのパネル調査の自由記述をもとに、部活動と社会生活との間の主観的レリバンスのパターンと、そうした主観的レリバンスがもたらしうる若年層の社会生活への帰結について、分析・考察を行った。

分析では、部活動と社会生活との間の主観的レリバンスのパターンとして、大きく①「部活動での人間関係上の経験が、社会生活で人間関係を構築する際に役立っている」、②「部活動でのつらい経験が、職場環境への適応や就業の継続につながっている」の二点を導き出した。また、そうした部活動の主観的レリバンスがもたらしうる帰結として、「職場や日常生活における人間関係の充実」「個人の忍耐によるつらい職場環境への対処」「職場におけるつらい上下関係の正当化／再生産」の三点を指摘した。本研究の知見からは、部活動は若者たちを問題のある職場環境に〈適応〉させるための装置になっているということが示唆される。

キーワード: 主観的レリバンス, 自伝的推論, 〈適応〉と〈抵抗〉